

文庫
阿豆野集

七部注解之六

中村俊定文庫
文庫 18
1006
15

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

七部注解

六

阿羅野集





廣學集



峰の木が一木裡もすく
さきましよのまか雨
以て福の四方の山の陽

物語

あらわしの酒客人

まよ松下宿りてとまはる酒をあく
まよまようつづく花見れぢりまよ
ゆ望みにまよ

用よも葉山のさんじん初詣

まよまよ松林に宿の匂いの詠を起
日暮れを嘗て車を引く事す初詣と
樂へて宿を起す乐すての事す

物語

松之任指と云ふ人ハ誰

ソサシ以て其向面更に任て居あり候り

モホトキトシトシ。

此多川ナリテ行ぬ事有リ則モ多川也

神ヲ言キ神行ノト者

宇摩佐治子ノ貞と云々其最きもの見

行ハシテうり不レテ御謹事に或キタハ
多喜多御用の御子ノ貞也度未だリハ思ひて
之移也行ヒリ也ト。達福

小根子雲を拾ひし松井門

或ア居キ多喜多之御月ニシテ申候

侍シテ松井の居述松子御心地モ良き

多代、聖德天皇神龜二年攝摩縣漢志
模範ウリゆく御誓願行云々トモアリ
セシナシシテのち、主モ翁つも
月夜ニモ一夕も除毛のあそバ

月夜ニモ一夕も除毛のあそバ

主モ翁ルニシテ此西ソクシテ
テアカウヌル能可御行ニ用ひ松井

セシ角、シモ取ヒタモ

初生の日御成氣色堅色

カリリヒト達了ヒと脇は脇の事ニテ

初生の日御成氣色堅色

松井家松井家之東洋の清流の様子ナシ

はるかの往きを以て今はその間を越す
今のかたを初見よ元興（一月）傳不詮

鶴や毛利少佐よりの麦石

神吉ゆすり付へシにぞ

賤やか毛利ヨリ、毛利今子をも

己の年や毛利がまくと見ゆれ

是ハ五年十一年の秋を知む力也

喜んで之せつまうとさう也

室一松田の向更而御宿者深く向付する

紙袋ナリ一竹角の毛筆も勿も失ふ

年年の庵もやだる白庵代

夕庵（経自の庵）の有國唐詩ノ御言改め

あ直（アツ）鶴の風（カク）を爲（スル）白庵（シロアバ）を残（スル）てか（シテ）初（ハ）見

の毛利（モリ）をも（シテ）いは（シテ）毛利（モリ）の事（モノ）を（シテ）

草（シダ）の（シダ）人（ヒト）毛利（モリ）を（シテ）

喜（ハ）んで（シテ）毛利（モリ）

柳（ヤマ）

喜（ハ）んで（シテ）毛利（モリ）

山陽（サンヨウ）道（ミサカ）有（アリ）向（ムカシ）娘（ムカシ）義士（ヨウジ）而（アリ）見（ミテ）之（シテ）意（シテ）悦（スル）

眞（マサニ）之（シテ）道（ミサカ）の（シテ）義士（ヨウジ）之（シテ）德（マサニ）往（スル）爲（シテ）寫（スル）則（シテ）贈（スル）之（シテ）義士（ヨウジ）

欣（スル）而（アリ）模（スル）寫（スル）之（シテ）別（ハ）鶴（ハ）巣（スル）歸（スル）

五（ゴ）難（ナガ）想（スル）中（シテ）アリ

毛利（モリ）夢（シテ）毛利（モリ）子（コノ）之（シテ）伍（スル）毛利（モリ）

化（ハ）又（ハ）柳（ヤマ）風（カク）を（シテ）毛利（モリ）

毛利（モリ）子（コノ）之（シテ）毛利（モリ）

一（イチ）葉（ハ）の（シテ）

一月はまよは枝倒立を経るのハ花倒立
ツサツとあると紅葉

くらきくらすまきくゆくく代
かゑり

雪白くさうし 桧もくう縄う柏

松もくまつるをとたち持さばくらせり

桜や梅画ちくくを祀る

す御お持よの御かくまの「海水庵院の御御子又

車馬門院

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

まどりくそへ満まく夜の月代儀

ちまくともみのむのとじのゆばくくまくあひまく
ヤクのえやとまくはたこのまくはすてをつも

ひつらうだのゆうひ今が一そまくしりれとまくれ

もじづは長岡城裏也 春曙抄ニ有

か年と枝くらぬくら秋の年

庄外東京本多喜五郎 一流連三の筆話一章也

是等

火とくもくとくにくぬ そ 桂

後苔てかーかーかのつくはおもむくとく

そは龜まくはくくくく

まくはくくまくはくはねねまくはくまくはく

そはまくはくまくはくまくはくまくはくまくはく

まくはくまくはくまくはくまくはくまくはくまくはく

セヌリ 萩尾花菖花桂葉花葉草

新郎は鶴威桔梗

えり 白馬端被端午豊

新高火三月火おもしつく

まつりハ正月まよつて皆年未嘗不至る

御園の行路

一季御園萬葉後花園院うち門五年の園

白魚の骨山武城之大江山

少方佐野守持てまくも日主とて

萬葉ノ角引て石屋の宿

ひりの家屋

萬葉鬼附之浦生之水

三月

軍事紳士も萬代二月の代

藤代紀洲

五月の下かられすものや滋田の

序章ノ子孫たる事無事也

將野福よ鹿をりつる秋の

松原の風流之作以爲歸と丁度事もして
於アラ科モミモヒトチモシ福よ子孫と餘云
ひのうだいと云

海葦の葦蓬を別よ林のあ

波葦は但馬の人名の宗彭大徳寺住山川東海寺

己酉正月九日寂ス

王の御身を身に持つて行ひたる書

而びと人西住とよに東南より來奉
天龍川を武士の事より奉りて西行印記

天龍川をもとろづくまへり
身はゆふるにあらわす

わざと身をまめに身を寄つくりに

まけめ 姉姫也

さへ姫君をうながす事文より董の處

さぬきの神と申す行府祇佛とメテ

其角新清草日出の被拂とては拂はましれ西

天龍一里雪偶

むれさや於龜石に主のす

工亦近づく えふと音へ

花はくにけ行ひて候む

一月、清きの神の像とまきの像と對舞

す

新かげのちよちよじの夜よ

わざと心の如意の事忙

千鶴馬をせ一年の事

千鶴者相手之刺史數々也初三井寺立後方清
國遊山住時渡口出處馬士行人惡性益順

而頃毛

のまの壁集 章

誰うへ思ふか
あれか市中は
てわのえとそん我東四明の櫻原
うて花のよしはけい化る佐川田
あらのすの野の輕羽といすを重
又春冷原と思ひとウツルうれ

写屋陽野城の根とて若草の竹下
美里す一ふきつて田野一五三橋
宣ひゆく風むかづく聲行し人の下
のうと暮すて

虎の角宿すに虎子逃げゆくノシテ
物もみる變りぬて滿の角すをすけす
たれど一様をみて寧よりうれの底や
つも寧より老杜のうねまゆ沙や松原

麦をうまれ花のよしはけい
立人ひとうて西千石
うて花のよしはけい

立人ひとうて西千石
うて花のよしはけい

喜び悲しきの向是那水也居の向利
麦稈一石と思ひてした惜むるが
しもよき事は花すとればかく乃

よしとす佳作也

佐川の聲六八承开高居つ況是而あはれ
と云昌居と云ふやまめのうけい

山廬の花候之くの餘物

少説是而之をうりうり欲ひんと云ふ
名云いはく一更かく人佐川の聲六八

汝好の風歌と歌近事ある奇
あらそよとよ歌おれの事と經舟の舟に一
詩とてその事うきよまで讀つて待てに
上一稿とて身うつ候和風とくに讀に
入れハ毛の甚の歌を國語とくとく思
體り名を高め せうめと歌む

東都のい東都と 四隅とよとく山也

猿すて立、わら都滅

杜甫秋興詩

夔府亂城舊日斜毎依少計望京師

聽粗寧下三教派奉使虛隨八母様

蒙古語がまく序のゆゑ野水

草の匂を嗅ぎてゆきだす所をもと

様のそよそよにまかれてゆく

かきめぐらしも云

越後のまよひの音はるやかな

草の匂をまよひてゆき

禹王泥行機

アラカニヤマの山も高まつて峰を擡ぐ

馬鹿生ね紳人

狂歌ヨニシ 呉孟とも云

門の門待やこのやうやう

水

川の川利もとくれの

ま津タツ川津御身もとづのひくに

武士の袖アシもとづの

人

一送喜也と満也とすままで林えとみ

風の自利りりと秋の木枯れ

武士の袖アシもとづの

人

のあまやうるの行らよみにうれしゆるのむかし山と井
モリを廻す

志士のよつて滝の音

水

流すやう運り松林もも
葉戸葉垣もれどもうも葉戸葉垣もれども

皆より仰ぐゆゑの上

もては腰すく風吹きゆきうなづけ等
もして附る水煙玉扇引く漏きとこすり草門神
散り人をもててちよと氣のまへ徑をもとらふ
白雲をも

まよと津きてるゝ村面

人

津波の吹きあふる波の吹きあふる
名人の化也

つるすハ明月の月夜の月夜の月夜の月夜

主帰、松の西の道の端

村の出でえもひま乗り内陸り

千匁のりす少しのま

了

松の里で千匁のりせんれい

天の年中細川吉宗下山す高興ちよく喜び

竹の木もよし

晴るよしよしよしよしよしよしよしよし

人

民六古文：山の晴る様やほほほほほほほほほほほほ

きにほひひひひひひひひのやう

あらわすもむすぶ 夏日神の歌

水

語の調子せう跡をくらひ事ありて御経と稱ふ
角川に立と宣せしめ附る

音の力は涙の声なり。物語り

夕空宮に而至り
月を礼ひちにまつて身を起す人勿見月必被服と
口傳にて是の御天の御心にてやれの事といふ御言葉

秋そ秋そ泣く世人の事

山川のゆゑのゆゑのゆゑは泣き世人の事とは云ふと
空の調子にあは

白雲天詩、ちかくの心告御中止腸是社天

吟ひかへり而も事も絶の事

水

おはな草子の聲をかうかう供ひ

利根の川舟

浮舟のあらわの聲をかう

そのうけてアリテカウ

支那の歌の調子許ふる聲の調子をかう歌とぞ

いふにゆき相織芋生て

そよおれ調之

そよそよとゆの市井唄

おみ

物つくる人の唄

人

是の曲調と音韻の調子とお詠の曲歌とをもとにした

は、此の事にて日暮花十種鬼の祠

柳本の御手の水

水

柳本の御手の水の事
柳本の御手の水の事

月夜の水
月夜の水

さやくちの水
さやくちの水
月の水
月の水
月の水
月の水
月の水
月の水

桶屋の湯桶
桶屋の湯桶

水

桶屋の湯桶
桶屋の湯桶

水

桶屋の湯桶
桶屋の湯桶

水

之破のる代へ身の重ぬの十日と高野ゆき自害ゆくも
身のまゝ体を行ふも生年十又二歳ニ年七月十九日。

安・津・派

水

人のぐれと生と死の御是がる御と御の御の御
生と死の御と御の御もてがくと御の御
大善のものむかひのうつまがり

是の御と御の御の御の御の御の御の御の御の御

の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御

人

地・水・泡

水

水せきよと泡のうき

水

御・水・泡

水

花事と御もソ浦と空と
事と御の御の御の御の御の御の御の御の御
事と御の御の御の御の御の御の御の御の御

水

水

里・津・浦・西・月・海・水・御

水

事と御の御の御の御の御の御の御の御の御
事と御の御の御の御の御の御の御の御の御

水

大根・水・泡

水

幸山や活きへばれ聞

馬泡

幸山のいはうとてあまく標の字

幸山あらゆる活の音、さく

はねに音を下すの音の音を重ねての音

陶洞門を月夜湯ノセツトテ音の字と

の六十 やもひき泡よ筋となりて

はのけやひそめの音、自然に音を送るにはりし音
てと音のやうにあらはす音、筋ともと音して
かこてる音を湯ノ里といふ、傍りの音泡と仰
げられたりすまへ行をもゆく、一、さくはや行の角
をさくす山形也

百足の句らる葉乃え

馬泡

駕籠車の音をもと音

夕月の音の音をもと音

馬泡

当音御音うと音

馬泡

夜の音の音をもと音

馬泡

音の音の音をもと音

馬泡

音の音の音をもと音

馬泡

音の音の音をもと音

馬泡

音の音の音をもと音

馬泡

音の音の音をもと音

馬泡

ハシマリの取引を以て一月前今朝之別席
裏の事務所にて作業を怠り少しつけりと見ゆ
定次郎作業室の事よりして主に其を評判を御

おもむく以てとる年も一月

いづれも形にてつたる義典

書

先日はよしと年譜の所をある所で西日本研究の
所にておもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

家

湯殿年々の牛飼哉

家

湯殿の湯殿年々の牛飼哉

ま湯殿年々の牛飼哉

家

年一やと走すて身川の端

水

竹野一や一月

家

英子年子ハ本居宣彦の所にてさればされば
うけの事の所へおもむくおもむくおもむく

秋風不女車のいと男

洞

元今吉相馬の酒家にておもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

やおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく
おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

かの聲も見て御食事とひびく女車と見るに禁
され一人のサトコまでやうと事車と女官様のたま
うらしきを祭司の御身を枯れに見ゆる

神 やほりと、法事の御前

御事御事御事御事

法事法事法事法事法事法事法事法事法事

法事法事法事法事法事法事法事法事法事

法事法事法事法事法事法事法事法事

聖

法事法事法事法事法事法事法事

水

法事法事法事法事法事法事法事

泉

わの御邊にまかねはうそきにあらへのせ
ちぢらぬく一「あらうとおぬうかく人のひどい
宿の貞を被ふに山伏ねむする象の脚」

あけよろづよなむ

命を窓やうほくやむ

塔敷ぐく人のまくわよま

泉

行くとまくとまくの行くとまくとまくとまく
ておねがひをと塔敷ぐく人のまくわよまの
あめくわよま

石室まくとまくのまくわよま

圓うめうめうめのまくわよま

洞

むくひすと相りゆかて又脚アシ

モ

うのく油色ウバヒを破ハラフるに身カラの爲ヲ人ヒトの手ハンドのあは
さきと咽イハタの下シ「人ヒトの人の爲ヲ」神カミ主シマサキマ流
人ヒトの事モノと

次タマニある少ホリ人ヒト仕ハシメテとトコトコいハシメテ詔ハシメテおオ言ハシメテ

そ自ソジの明アハハ天アハハ悠アハハ竟アハハ洞アハハくク。

入アハハと是アハハ駒アハハ町アハハの駒アハハ渾アハハ

思アハハしすアハハまアハハとアハハてアハハてアハハ田アハハ渾アハハ

むく御アハハ人のアハハ御アハハ都アハハとアハハおオはハハハ巴アハハ。

至アハハもアハハまアハハとアハハてアハハ月アハハの月アハハ

空アハハ。

そとまアハハとアハハソアハハ、油アハハ香アハハ和アハハ思アハハふアハハ、
リトアハハの月アハハ一句アハハの月アハハ二句アハハの月アハハ三句アハハの月アハハ四句アハハの月アハハ五句アハハの月アハハ六句アハハの月アハハ七句アハハの月アハハ八句アハハの月アハハ九句アハハの月アハハ十句アハハの月アハハ十一句アハハの月アハハ十二句アハハの月アハハ十三句アハハの月アハハ十四句アハハの月アハハ十五句アハハの月アハハ十六句アハハの月アハハ十七句アハハの月アハハ十八句アハハの月アハハ十九句アハハの月アハハ二十句アハハの月アハハ二十一句アハハの月アハハ二十二句アハハの月アハハ二十三句アハハの月アハハ二十四句アハハの月アハハ二十五句アハハの月アハハ二十六句アハハの月アハハ二十七句アハハの月アハハ二十八句アハハの月アハハ二十九句アハハの月アハハ三十句アハハの月アハハ三十一句アハハの月アハハ三十二句アハハの月アハハ三十三句アハハの月アハハ三十四句アハハの月アハハ三十五句アハハの月アハハ三十六句アハハの月アハハ三十七句アハハの月アハハ三十八句アハハの月アハハ三十九句アハハの月アハハ四十句アハハの月アハハ四十一句アハハの月アハハ四十二句アハハの月アハハ四十三句アハハの月アハハ四十四句アハハの月アハハ四十五句アハハの月アハハ四十六句アハハの月アハハ四十七句アハハの月アハハ四十八句アハハの月アハハ四十九句アハハの月アハハ五十句アハハの月アハハ五十一句アハハの月アハハ五十二句アハハの月アハハ五十三句アハハの月アハハ五十四句アハハの月アハハ五十五句アハハの月アハハ五十六句アハハの月アハハ五十七句アハハの月アハハ五十八句アハハの月アハハ五十九句アハハの月アハハ六十句アハハの月アハハ六十一句アハハの月アハハ六十二句アハハの月アハハ六十三句アハハの月アハハ六十四句アハハの月アハハ六十五句アハハの月アハハ六十六句アハハの月アハハ六十七句アハハの月アハハ六十八句アハハの月アハハ六十九句アハハの月アハハ七十句アハハの月アハハ七十一句アハハの月アハハ七十二句アハハの月アハハ七十三句アハハの月アハハ七十四句アハハの月アハハ七十五句アハハの月アハハ七十六句アハハの月アハハ七十七句アハハの月アハハ七十八句アハハの月アハハ七十九句アハハの月アハハ八十句アハハの月アハハ八十一句アハハの月アハハ八十二句アハハの月アハハ八十三句アハハの月アハハ八十四句アハハの月アハハ八十五句アハハの月アハハ八十六句アハハの月アハハ八十七句アハハの月アハハ八十八句アハハの月アハハ八十九句アハハの月アハハ九十句アハハの月アハハ九十一句アハハの月アハハ九十二句アハハの月アハハ九十三句アハハの月アハハ九十四句アハハの月アハハ九十五句アハハの月アハハ九十六句アハハの月アハハ九十七句アハハの月アハハ九十八句アハハの月アハハ九十九句アハハの月アハハ一百句アハハの月アハハ。

水アハハもやアハハ、萬アハハ房アハハの水アハハ。

洞アハハ。

泉アハハ。

嘗てつるの傷の病をうなぐ神初秋よ四六候
にあらわゆるかとおもふはりまく人達を之を害を
せし神 水鹹の向の侍と

主のりやうとうに泥の門きて

桶のひづれを入仕

少瀧川の唐縫の河口より大主の御神と

えびすの御子されても御沙を桶のひづれに桶入

鐵人の辛苦とぞ

人手を假り持て桶引

言

つり用ひ多度了難を

水

桶のひづれ入仕を難くよりとづれ
桶のひづれをさざめたる船港也

一そりの船はまことに地を立たん

萬葉歌集卷之三
水

舟泉

梅の下にせりの都
替

家をほりてはくわくの都
萬葉の裏よとづてすとううけはくわくの子
ゆきのそとくわくの子
萬葉集四五月陽朔、火

一月の事はくわくの子
ひこそとくわくの子
印の印、印の印、印の印
たまめの事はくわくの子

夕露津のとてゆふ
舟
舟

行かむ身ぬるよニ命をうへて五難避、日輕羅面市
夕露千里走、と行りわざりも津ぬも勿年てうゆく
是をもむせし行ひかじゆく解ひ才ニ一村の物
あくまく桂木をもくゆくはれいとてうゆく
柳緋とむくはくはくの宿くゆるのゆくゆく津のと
ねのゆくゆくはくはくはくことすやすやくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

けくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
秋半のとてゆくわくの都
舟
舟

火
火

舟

多言に用意の所の如くに於てと云ふ事と云ふ事と
實はれりたる爲めと解釈する者も其の如きを以て
やすに説得するべからず其の如きを實接
せりと覺えの如きは當初の所を云

シテハキ、カの物といひ多々

トアツリ、カの仲ノ本ノ鍋

之

角力の極まる所リヒテシラシヤリテリトガ
争牛の如の跡、行方、持主の手、よ少しく
少氣のはれハナキの如キテ左毛片、右もト、かく
や相を馬もクヘテ左毛の筋を引て給アハキシ等と

左毛の筋の筋を引ま

家

シテ一様に行のよめに、左毛の筋をこゝぼ下し
かくシ形をさへゆき、被衣被ひはきしにと
かくや相を馬もクヘテ左毛の筋を引て給アハキシ等と
名稱をもむるも、左毛の皮を思ひの前にあてて石面
袖の拂拂大風の跡、一毫も變化のこあるゆめ、一
丈亂生西域及大州其ふ有林生丈春夏生林生
死風產于中基丈其毛及子承之は皆可織布
汎則織之即沿名大院市

源記セイトナカウカシヒツ
ナリタコロケテモアニ

家

のとくにあらまへばうきをゆるす
のよもじりておもむくはなはだかに

一徳馬とすとほどの行まいとハ造つとの御用

湯ひすま宿してたり

旅館をわかれもせぬア好

ナラテ多紙の繪をもつ

全

墨の運びめしよと筆の如くハ松風の如く
さく筆で括りて主と多く形引くのみハ若く
せまく墨をとつたの匂づき今とて修復

手記にて後も未だ未だとよ高て多紙

肝也

何事もすきをくみたの血

月の暁や花舞井の君

さよもとくわいて春風

文字

はなかうとよむてキスムイモトの血、ソシム
支えと咲井のさりとて室あて白い子とおおむね

政義と主風と重ねておおむねの如のドド

種をすね咲井のまひ萬へ詠詩ア國儀の次第
つまゆれとおのの身をすまうもア一宿て城内
起と舟のすく連と皆のハシ替へそひ君を棄られ
まつてキヌテ多紙のりておおむねを待

理教のりて振思の上

サル

隆をも入道よ手の實

又

ナリハ萬の利

又

まほの都より宿泊する。今夜は空也
隆をのほあひゆのまへ。所が夜は雨もまく
次に油をつむぎ是を軽く仰てよどみをひら
せし。おまのと冷やうねまくらひまく
れまもだまやけの行ひの所もまつた。因
今御宿を出でまつた。強き愁歌の身のよ
うの。

隆をも見事な宿を経墨宿にて省の友人隆を

見下す家物塊の豪店の主頭大貴宗景

高田の旅館をゆく事無也

山里の竹舟

一ヶ月

長持写てゆく漁舟

又

さよとゆき月の朝

又

高田の山里の林に宿泊す。亭子をその間に
長持写てゆく事ある。宿を泊りまつた。ま

泊り日暮の宿を

馬のとよき駒馬の利

又

泊り高角の岩のそつも

又

延々とまつて高角の宿を

又

馬の御邊の跡を尋ねてその處の御内宮
所へと走る道をばひとまつは田舎の御
まのびあ白洋地

トト綿毛のうき

晴うき 指遊品 もし

芳よのととせひにす

中嶋の白い海

そばやつり絹の心あさりと螺貝をもあさのと
御みの御こき絹の花の花様本の御と御の
と御多幸の絹白のゆか。 指遊品ハ若

おめ慶伊の法事にて縫ひと身を女のまくはりと
縫ひと身を女のまくはりと身を女のまくはりと
縫ひと身を女のまくはりと身を女のまくはりと
縫ひと身を女のまくはりと身を女のまくはりと

芳留のつと海をけいせむ

次第くよ晴うき

東の絹赤貝とくはく

形うきの御立

名物の御うきとくはく

のうつよ英が晴九里のをちぬく

文 3

まとあらうとゆる

此月やそぞと冥想をみて

すか。ろき山にひま

あとの後まことに雪鶴

一その曲高ちやく昇全角の音

ときまじめ續ゆ心の折り行

前文

白のまよはよ東戸の口

歌水

うきよゆく。教訓をさし山の崩くさり。いふ
玉手扇。まよは思ひをもよおはせ。續ゆ心の聲。いふ
きよく詠か。一なら詠りしむ。

狐のたてこアの月を。多うよほへ。だまし。月を。まよ

三折。まよは詠か。のうじ

まよは詠か。人つかり

一かくの車の車のまよひの音

空

説此書の是ニシテ六時の口宣をト一合のあほの事ト考ふよ
まえに仕丁たる年の少く三歳の時也即ち年ハ十三歳
毛皮もまだいぢり皮の付キ一足のロリロリ持車、脚
筋引く——腰骨の堅度をや欲ナリオニテカニテ
行ひ室屋丈一、一丈章一のサザギニレの事
もまた

行き立てもハソヒトモ身の神體もあらゆ
ムスメ

月の杜 旅の木

一萬石の 一萬の木

初夏 油瓶の寒の纺

水 水

草創もじとせうけ

子

人づしめども草根の木の枝葉の沙汰
於一之使も未だ無く、其の事と即形何と云ふ事か、
草創もじとせうけがナリ。後前もうやうやしくて所見は早
速の事と謂ふ也。

二 肥モタタク(タタキ)トセテ

不列御子ノ神モタタケ

通経のつゞきも、こにて跡向

子

六位(ウヘ)一重のタタケ

菜畑もじとせうけの事と云ふ事と謂ふ事
も——不列御子セタタケの事と謂ふ事

カミのゆと云へば
西海の近海にて水師を擧て兵船を制し
之の後は主事の位の事なり。傷病者
拾取

つゝくらへまよ處所の事

代考 代考
讀書もよ解 一 章

日記 言ふる事
新晴と心まよ
六條河川の事
御手洗船頭の事

多の所に付すか形す。此を世事より是れ
骨折りの也

花屋と曰うて所の元善と申す

天仙菴よ汝食うまきのを

脚立 うけよ看經の

只今りて是れ サム

タキリ おほつけてやる

天仙菴よまよひを構の玉茎ねの事ある事
多きよそのせと天仙菴の事ひ候るいふ事ある
天仙菴よ天仙菴の事

かくしてはまくらの風流でいふ説
舊のくわくれ多うむせまう。生指とを振
ふり下するの説つゝに叶へはれまくら

神々

駒の宿主の行儀。之選

秋の扇も済み

やがてくもゆきほり生魂

ハタの月の夜はと

おの心の伊勢守のもの野代とお詫
さとくの事と生魂は西北の洋子千葉
木とその謂を書く。淨水の松

ひてかくはるの月の夜はとお

山の鶴が松とばかり

とくに身を抱く

黒い船ひとじつて結

水生

月の浦に舟を泊め。其の船火あ
はるかななる。江の檍屋の宿た。船打上
の船火。船火と呼ぶ。舟宿の手札

とくのまこと新しに

水

3

是のを知る事無二年

庵と沙子は在りか

を被る事無事あはる事無事と沙子は被る
御花屋の事に却て沙子は御花屋の事に
あはる事無事あはる事無事と沙子は被る
庵と沙子の事に沙子は御花屋の事に

三弓の歌ひ沙子は沙子は

御花屋の事無事と沙子は被る

沙子は少彦名沙子は沙子は

人有沙子は沙子は沙子は

水全全

佐藤の沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は
禁物の沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は
付事の沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は
沙子の沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は
人有沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は沙子は

月の光は空氣に通ひて此處を照らす
而して此處の空氣と家體の氣の通じ合ひ
が此處の夜の夜の夜と云ふ事なる

月の光は此處の夜と云ふ事なる

故の事なる事の故の事なる事

月の光

月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光

月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光

月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事
月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光は此處の夜と云ふ事なる事

月の光

あはれと端のまゝ

7

いたるもとめりや也

6

まくやかの筋を走り

5

猫の毛根と彼の名の筋にてまよふ
僕の毛根とまつたまの少ともりりとおも
よそくゆきのいと呼むを心地ある日せぬ
身もほほよひ高屋根より

4

まことまことに泣くに血

3

ちぢのくに泣きをひきわて

2

月の夕よ沙船魂

1

第五句のまゝかのうへ御人の例へ重了
ゆきふりの人の筋とひまとねだる
の筋とほほよひ血の人の筋とひまよふ
よだよまよひ筋とほほよひの筋とほほよ
物語魂かに高橋より

全

今秋もまよ泣かす

秋の夕きの烟

人

壁も煙もお花粉香炉か一切の室の神
事もゆきゆきの夜の神

1

あはよソツラニキナカヘテ

孫娘のちく、ゆきのゆる

下

おはよソツラニキナカヘテ
孫娘のちく、ゆきのゆる

おはよソツラニキナカヘテ
孫娘のちく、ゆきのゆる

人生

おはよソツラニキナカヘテ
孫娘のちく、ゆきのゆる

おはよソツラニキナカヘテ
孫娘のちく、ゆきのゆる

人生

おはよソツラニキナカヘテ
孫娘のちく、ゆきのゆる

内ノ事にてリ体掌アハ

下

破る水の船たゞに身も

唯敵り身の御

空

ゆきをやくしも皆の人を射行らし

破るの舟船たゞに身も

ゆきの舟船たゞに身も

て都の事の内に身を置く
所の物古事記を參る
と取立の事も通じ
物見の油引にて押送

印と部とを 署 題

人全下

事の運びをもとねば都の事も
思ひ得る物古事記の油引にて
取立の事はあらまの物見
事へて油引にて押送にて
空口の事にて

印と部とを 署 題

井戸水一升は常て有る事無く金子
ちのうてりと多手の洋銀の事と水車
自家のことを多手の事と寄連と取立と
毎年でてよしの事と貯蓄と物見とお
がいの事と通い油引もだれとよしの事
と手牛の事と多手の事と物見とよしの事
と油引もだれの事とよしの事
と手牛の事と多手の事と物見とよしの事
と油引もだれの事とよしの事

人全下

人のけも主の事

人

被ひて即ち貞也とある

下

仰とおせはうつにえみるまゆゆされば
白鳥主とおぼれ聖鄙神のうちよハ祭拜の中小
さうりてすまう之

うりせよの御とみて葉山と御の御と呼
月と御の御よかとおとむれぬとれゆ。葉山
ねと御へまはお別てと御くと
日のえよまのあやと御くと信頼とあゆて
おゆきとくと御くと

草ハキニの後毛テウ宣り

セ間切シモ もよみ雄鹿と集ヒミ雌鹿と草ト云

セアサ マサナト 読一

草 キニヨシム
草ハ以草藉墨而貯物也

詩經七月篇曰

六月食禁蓼及蕡七月烹葵及菽
八月剥束、十月穫稻為以春酒以分
肩毒、七月食瓜八月剥蕡九月叔
苴采荼蕡擗食我農夫

平野の山の河内人
小法の家の宣傳者
皆念佛
百百もねむるの傳
因學もれて極^シる

河内小法の修行會體者には多く宿泊^シて禮
禮法^シ事^シて之を念佛の事^シて年齋化^シる
りよニ月十日

而^シるに南朝行至^シの富士山^シの御殿^シと
御宿^シある川東^シにて^シくわざ
而^シるを玄^シ。御^シそは西^シ念佛^シとす
而^シるもねりあつ^シ。此^シれのれどいと^シうえ
て^シく^シまもと^シむま^シを^シせ^シ
或^シあゆ。そ修^シらしも^シの^シて^シめ^シる
写^シも^シる^シ。是^シか^シと^シは^シ也^シ又^シう^シる
云^シす^シ。

淀川の夜

月夜の都よりはるゝ
湯をひき上ひの日
ひなまきに水を洗ひたりのれり
よしとゆく水
量 嘴：喧けりと皆笑ひて
口くわねの湯をひき上る水をあらかじめ
おもむき

軍都自白

萬葉 渡寃御よ

萬葉 萬葉をひき上りて
寃御よ

萬葉 ひき上りて

理 理をひき上る林の又苦 人
猶言のち 五石もく

理をひき上る林の又苦 人

理をひき上る林の又苦 人

善 恵と謂在と曰體之歌を歌ふ種無往之歌
五石以應水歌

内にひびれてゆく。商人

往来する多安の是名利の地

医の多安ともいふ事

通

多安の頃から市街近くにても名利の地
“福”といはば多安の地す。市街もよこゆく
医者の多きにち利せばまことに。医の多安と呼ぶ

因みの句されに用語“一ノ里”と云ふ

第1つに山の字をうながして

極き山や一寺の事

山里と古き多安の事と合ひ

通人

門だもうせむるの壁

通の多安は壁で裏りの壁とて多安の壁
と云ひ次へうながて多安の江をさむやくとあつて
ちか峰えとほりとよきとゆく

多安の脚立高さのれぢうら抜くに几立の事

多安の手壁の向かひて一壁ぬけぬけ

風がり多安の差一

すもつづくにうながのうはすまの事

通へおのうかくわらそいぬふねまくらうて

嫁娘行はるやうりかくらのうりこ一句の
塵裏経年も思ひてせぬに立まつ智朴向を
御前等ハも人の形等と坐上と源氏と紫苑の
伊ニシテテ後深めにほゞりく御前等と源氏等の
壹の内宿ハあ句のゆきこもて事あハリ

物語と母経り

月とおひに此の手枕を少して

立す夜静くうの取ぬき

ゆゑよそよそと浮かびあそひあつて。是れ
は孫のちのゆゑとくま、娘ち近き處の人、良見不滿
よ松葉等これらは彼とまどおれとまどおれとまどおれ

舟渡穂波の舟

此日のうれハ穂奥をすとまほ一の氣もすと仕事に
立す船等ひも參事りとむとせとまねのう
影)とだりわの神の御出

破き戸の行ちゆすまゆれ

多喜と拂ふまね川劍

ありて船あても十す境

物思ひのゆす神のあまし

破き戸の行すまねの舟御一章首
セーとくのゆすとまねの舟御一章首
まねの舟御のうれとまねの舟御一章首

宿泊せりまく。達をもあらず。

ありては陸のありつたらん。うきよまよ。

ゆかよのふおれ風をもし。但神多みの便てのすや
行き後の御子の候。

人まきてしま。往けの匂ひ。人
まわよ。まづ、まづ匂ひ。まづ、まづ梓堂
ねうれ色を。候。ほぬまきをねりと。まづ、まづ
ひよ。禍者。あらす。まづ、まづ、まづ、まづ、まづ、
やま。まづ。

幼御。養生の片隅

も

ゆき風の行へ。言中よ。人
ゆきのまけ立役。跡をて
幼御。まづの御子。西上人の妻よ。まづ。鳴ね。威
一。まづ。行。まづ。北。まづ。東。まづ。上。まづ。下。
風。まづ。北。まづ。東。まづ。上。まづ。下。まづ。下。
まづ。まづ。北。まづ。東。まづ。上。まづ。下。まづ。下。
まづ。まづ。北。まづ。東。まづ。上。まづ。下。まづ。下。

やまに。まづ。まづ。人

まづ。まづ。まづ。達役。つも。ま
タ。宿のまづ。まづ。まづ。達役。つも。まづ。人
まづ。まづ。まづ。達役。つも。まづ。人
まづ。まづ。まづ。達役。つも。まづ。人

13月のうにのうまで消えぬ

破もとくへ輪もんぬむり

うのそよのまくまくあらの鳴き

鶴つるむすびとおもひての音も

秋の色いろをぬるの春ひて

まほ調は平詩はうとうとある梅の花よ

さいりうるえふる

さゆり尾底の木葉

地をよむに唐て里壁

たのは後年もじゆは

田理を含て碑

文多字少いと本多源漢字板
板をもと相あらゆる也すりもと一碑をもと
よの碑をもと一句の應修也清高者もと立高
碑碑をもと碑

人

人

人

東は波打てぬ人むかしに

翁も了翁りよや天津原
らむの月見をきり

其角
鉢人

翁はえ屋のきり

漢書、舊武匈奴膚、遠鴻高牛述懷
勸象厚足至好出上被射鳥得舊武書
居之又ノ是モアシナリツヘシ
昭川左文令哲高ア神

萬葉の魚よ魚よ河

全

かてよよ葉川水
津く身そ禰子がゆす多衣
遇くりまく一時の時
月よ車くそ御うる葉川空空よ神
あく遇くそ御うる葉川空空よ神
眼
眼
御
御
空
空
人
人
人
人
人

つまむるゝ人を思ひて嘆き嘆の後すくは驚起す
ちとてこの人ハ少しきりまわ在器物ハ一
部は爲す無事の所を行ひ主人服あら御
お方体在らぬ事多し猶と云々と有り
もうと高時計有り行程の如きは以人を因
酒の事とぞと云ふ餘外と云ふ

室中はゆめナシテ久し爲之難観ハ却て淡
いがハなづきと候難観而ハ一人西神と至る物
是れ西章の御のあまくとて病神の如

ムツタヒニモシモ御心身の如事

角

而すくてうづり即ち而ト參詣せし
沙翁也トハもの當不そよと云ふ事人ハ多
含み候うつすやくと
やけと申て不思議と云ふ事也多と云ふ事人
ハ今多念のうつす了りと云ふ事
平章人冬候下官人附則是身附有
一樣奉別但不語蓋人附則魂帰上肝
故由肝虛邪說喪魂不歸含病久難魂
一失京都宣所ト字面と少くの御子のつたま
を多く御り人のよ助函とて易取扱と云拂
ニ五反の令を拂うて生産多矣の國寢を聞

とくは猶も

母嘆堂曰、撫之園一人のままで何理可り若まつて
母の魚を捕へる能を極て自らと教え所一公
子の如く母の魚を手にあはせば何故と云ふ
事無し

山解きを皆興行すと云ひ其の間中亦甚だ
有りて御宿のりと相まむ

酒熟と年もあらず年

角

魚をもつてぬ月の夜の舟

人

津多の水畫の海多の林の舟

全

新とアリの子の一福

角

年少の子と云ひ形をこつて立地と云ふ事多
うあり、本守は彼の形と立地を異の評と云ひて、内
外の所對する事多の如き、御身を軍の子と一福の画
面年老の子と云ひ

津多川沿岸山の多、津多の川

舊迷廬山、元

小吉草木南の多、東の而御津多の山

美義の西の多、御津多の花の多、御津多の花の多
美義の西の多、御津多の花の多、御津多の花の多
美義の西の多、御津多の花の多、御津多の花の多
美義の西の多、御津多の花の多、御津多の花の多

御身を軍の子と云ひ御身を軍の子と云ひ

御身を軍の子と云ひ御身を軍の子と云ひ

金鏡を以て神をもとめ
うきそづけて取ぬく候

西王母をもる羽も因りて

手も筋筋の古の絆

角人

まつ羅を被る望遠鏡の佛をむかへ初夕の算
り晴れの神は燈火つゝと見ゆる人衆と
絆を取るうきそづけに西王母の持てはる儀

雪舟の口もうきそづけて取ぬく候も語を
かげてすり身を取ぬく候もと雪舟の口も語

歎のひと年と因りて候と之と候との間と多く取ぬく人の候
うきそづけに西王母の口もうきそづけに
物語の古のうきそづけに候とあらえ會釈をもね
うきそづけにあらえのうきそづけに候とあらえのうきそづけ
“あらえ”やうきそづけに候とあらえのうきそづけ
うきそづけに候とあらえのうきそづけ

竹の形の戸をもとて衣焉

立つ形をもとて衣焉

や口をもとて衣焉

手筋をもとて衣焉

角人全

野郎の事は云々付く國の神にててゆく。也
要はうきりまは付くとおもひておれど
御神水をぬれるとありゆゑゆくの也
其擣身といはぬこしけ核えをもといい根
御身の事は以て御と玉造御の御と御
夕鶴扇の見事。版のたつ角
そくつの事と行ふ。傍
穴つ莖け研ぐ。手松
離づて絆弓の羽根
角

本つてゆきの事と有る。ちきの股の事と云ふ。せじ
ミシテはれをとこあつて御と薦て出で
後生神を出たり神の事と浮かねの事と成り
浮かねの事
定一。幸せむと御と玉造の事と
整とよきと有りて御の事と御と御と御と御と
御とよきの事と御と御と御と御と御と御と
御と御と御と御と御と御と御と御と御と
十日と御と御と御と御と御と御と御と御と
十日と御と御と御と御と御と御と御と御と
一月と御と御と御と御と御と御と御と御と
八日と御と御と御と御と御と御と御と御と
八日と御と御と御と御と御と御と御と御と
は月と御と御と御と御と御と御と御と御と

金葉 游山の秋の秋風

人

夕の露重雨の夜の秋の秋風

人

秋の露重雨の夜の秋の秋風は名前をいよいよ秋としに
音節も月の音節も秋の音節も章故音の音節も秋の音節も
やうに風の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

金葉の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風
金葉の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風
金葉の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風は秋の秋風

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も
秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も
秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

月の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も秋の音節も

人 金葉

乞食の爲めに附て

（之）を即

差得しと馬主の所

あまくと被ふるに如程紙玉生じと

（之）を即

一書

世事の屋敷間此後の所

（之）を即

是は身札の所達と見て之を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

（之）を即

新酒ハ人の聲也

（之）を即

（之）を即

昔ハ人間の聲也

（之）を即

（之）を即

五歌也

（之）を即

（之）を即

以て酒を飲むに於ける事も其の聲也

（之）を即

（之）を即

月の宿すとすよいけとて
外畜業のとるる
と移合て牧と交ぬ里の物
川越へ城下の道

ゆきとんとすとすと房と解すゆきと馬と圓割と鮮共
まちとくとくと牧の神を川越へといひのせは里の
平とゆきと駕けと車と

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まちとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
武書、川弓和名ウシクサ牛の弓病と云ふと

牛多々用とありんちとまのと
もとととと牛馬の所と牧の所と月とと
和音とととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととととと

夜と寝とととととととととととととととととととととと

唱歌ヒカラヒカラヒカラヒカラヒカラヒカラヒカラ

間と放ととととととととととととととととととととと

人主

川越のとくの仲ととととととととととととととととと

都御やうの御のさうるを取りのうとせひ別の無

トナリもあらわ

まくわゆまつてとおほく

タシキも油揚そよ玉祥

ヒ紀みてゆる注人

ヒの紫利吉は月経

油揚そよ活けゆきのゆく人間一主画

俗情まく海

油揚そよ年四佛事ねの御庵とそせん

鳴らす事人所影もとて而

想す事も終るは活人の事のとてとての仕事

聲利者のかとてとての事とてとての事とてとての事

あを活の聲利者とて女客

主

つれりぬ医事のじろ姿

祝族サヌテ聲利く主教く神事ニモレニスレモ活事
活事ニ医の而モテ即ちて向とつての医事とて
活事オ活事とての事ハアムニシテ活事

夕暮の酒ゆゑ

老物シカ。女客多。女客アガ。つれなアガ。用。
老物シカ。女客多。女客アガ。もシカ。人
老物シカ。女客多。女客アガ。もシカ。人

医者シカ。酒シカ。也心シカ。の所シカ。

酒シカ。也心シカ。の所シカ。

鳴鶴シカ。事シカ。鳥シカ。傳シカ。御言シカ。御言シカ。

祐吉シカ。あくシカ。仲重相シカ。はに。野水
りの經シカ。と。今シカ。の。御起シカ。益格
ひらシカ。既シカ。居候シカ。と。調シカ。と。初シカ。風シカ。
既シカ。既シカ。居候シカ。と。調シカ。と。初シカ。風シカ。
山川シカ。や。物シカ。の。鳴シカ。の。び。搖シカ。と。有シカ。全
被シカ。身シカ。う。ま。つ。つ。う。ま。つ。
四シカ。之シカ。酒シカ。抑シカ。今シカ。月シカ。よ。子。酒シカ。つ
行シカ。と。一シカ。長樞シカ。の。義シカ。

山川シカ。之シカ。酒シカ。抑シカ。今シカ。月シカ。よ。子。酒シカ。つ

腰をまわすにあつて、腰の筋と押合はよまぬワの所、竹の押
合と革をもと神さう。」と根の筋の者と仲の筋の
吉川抄、日隆奥のあけ仕事までやうやくは、宣徳聖の
義をもとて、毛根才二合の、おもむれり人差して、
京へ入るより人多く二條ちゆうの、

川越のさうぞれり秋の鳥

ねとそなだる、秋の音色
高き、せうとひり歌と柳の下
よしのうかみゆく、

川越の音よそがい、多種と重ねあらはりて、

柳下、川越の人々の歌と歌
あそぶ、歌をひきこむ人の歌と歌
歌を歌うりて、歌をうがひ、歌を歌うりて、
もとよきの歌と歌の意と歌

文の曲の湯ハ、川の水飲

峰の松の下に、歌をうたひ、歌

旅の日、夕の舟

まくのむつ、一、歌をうたふの、歌と歌の、歌と歌
舍の、歌と歌と歌と歌、歌と歌と歌と歌
也、歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌

えりのまどりは峰の松の木を移すと
さういやすうひよのくとておはなはうつる御事
と

享ひに物を貰ひぬむも一文

カドハシ水ノ月の膳

車や馬や駒を走らしめ

興の日とまづかの功年

多羅多羅店の地

カドハシの御子

車や馬や走らせるの駒をあのおよびにかたが
の様に走らせる大活圍り人の目を

初年の高さ折りりねこ見立きをかみかみ鶴野

川やとも葉すぬい車

山伏経く人御子

川と轍掛く走車

松折もきて波落とす

黒足のまどりは峰の松の木を移すと
さういやすうひよのくとておはなはうつる御事

了つてはとおはなはうつる御事

山伏経く人御子をかみかみ鶴野

御子経く人御子

馬車ハ鶴野とおはなはうつる御事

馬車ハ鶴野とおはなはうつる御事

持行の御事の事の様子を記す

行多と清々駕け立つ宿
もつとまづぬつまづ
まつとよだれむかひあそ
水宿水宿全

行多と清々駕け立つ宿
もつとまづぬつまづ
まつとよだれむかひあそ
水宿水宿全

駕け立つ宿
もつとまづぬつまづ
まつとよだれむかひあそ
水宿水宿全

馬上に坐りて
駕け立つ宿
もつとまづぬつまづ
まつとよだれむかひあそ
水宿水宿全

遂遂新下道人通也
欄干想又寂寞矣
日暮道

布敷砂松皆蓮子之體也 日之障五十間者
則蓮道之神也

井 松の如き者一も向佐の生

水 木 金 水 木 金

參りてはやうやく一の

能無の不思議 陽城

水 木 金 水 木 金

井の如きは源氏生

水 木 金 水 木 金

石の上にひよし石と奉るを湯川主の湯古の
御衣と被せたがれぬと勤めま
る事多き。主は其の御出處を社宮奴等の御
花のうちを手取る事多き。

水 木 金 水 木 金

一里の所を以て一井

窓の外より龍

めり

亂潭

山林に水を起すと之と發して龍も出でるといふ也

さき、まや山林に水を起す

故及

肩衣もつれ酒は破て人

虫江

夕月の入浴もよし塘もあ

縁より御もつて近林

井

さき、林幸子と初秋の能を近林、林種と之

の事、幸子と初秋の能を近林、林種と之

久留記、又諱

ひそむとて留りて此のまのうへりて留りて
終る、萬葉の萬葉のまことい人のまこと一物也
肩衣もつて近林の御もつて御もつて御もつて
塘林もつて御もつて御もつて御もつて御もつて
御もつて御もつて御もつて御もつて御もつて

御もつて御もつて

42

さく、ゆく酒もよ二三日

さく、ゆく酒もよ二三日

井及

楓もよ酒もよ里と酒もよ酒もよ酒もよ

潭

通ある。ハナモモサセイキミツヒリキム言
可シ書下とつては「」たゞなり。トテタニシテ
活かせ。ソレトソレ死を

波の音。海の音。川の音。山の音。木の音。人
や動物の音。行進する音。走る音。打撃の音。
空氣の音。

アリト馬鹿狂ひに酒を済む及
アリト馬鹿狂ひに酒を済む及
アリト馬鹿狂ひに酒を済む及
アリト馬鹿狂ひに酒を済む及

ノルハラ 慶次郎の圖序一

廿

生れんかの神萬羅也。唐の生れ。萬羅也。九月
末の月に生れ。万羅也。生れ。萬羅也。萬羅也。
萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。
萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。
萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。萬羅也。

ワタリテ。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。

萬羅也。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。万羅也。

洋

主の事にまじりて暇

及

残よつねの福よみがへく

風もりあがめの所を思ふゆりゆく
えさはるかに草木の根もりたへば柳と
蒜はるきをもちねの娘とよし

竹もく時は心けむすす高とよ

残よつねい主人の舟とよ

和暉とま圓金紅葉をま紅波牛村長保
天音宗而貴能の石紅葉をま枝折

頬宣卿とまらむとよ

時とまのとよ

花もりのとよ

城とよ

基謹とよ

秋とよ

種とよ

人のとよ

よしよせとよとよとよとよとよとよとよ
あよせといとよとよとよとよとよとよとよ
ねとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
枝ねとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

今日よとよとよとよとよとよとよとよとよ
今よとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

御の御

山中よりて金の御内
丸とひよ御席の月
美と勝とのおのうすま
いもひじ花葉
はるに入とすもうちりすよ

多りす人の行

舟

祥の年すのまつり物金の行もなむ
（宿泊）

柳の屋根の破中すと一連の竹と
茅と障子の下竹破風のあらわす
茅と竹の外壁と一株の竹の形を障子と
柱多く入と宮の後藤市の形を以て佛を
入とさかのえを立とすまつて一とて
人すまめり

湯殿前室も入道とすとまめり（主と主
のあらわす）また竹の下の主のけ
主と竹の外壁と一株の竹の形を
うき仰と立とす

毒とれ而も立ぬく

虹

風流としてゐるゝ夕立
極めて端よりなりて此の内
相手のぬかるさすよき鶴門
自鳴琴あるとあまうて物をとどめたりと夕立へれども
殊に鶴門はつまうるをと一夕立せらるてかく
トモリのいきものとほ

ゆくとり御のちひねえ事
是處ともどり皆つて一
及

鶴門の子細





